長野県短期大学紀要　第66号　2011年
Journal of Nagano Prefectural College, No. 66, 2011

日本における「千夜一夜物語」の受容史（1）

The Reception of the "*One Thousand and One Nights*" on Japan (1)

ナグラ・ハフィズ　Nagura HAFIZU

長野県短期大学紀要　第66号　2011年
Journal of Nagano Prefectural College No.66 2011

長野県短期大学
〒380-8525 長野市 緑ヶ丘 1-7

日本における『千夜一夜物語』の受容史（1）
The Reception of the "*One Thousand and One Nights*" on Japan（1）

ナグラ・ハフィズ　Nagura HAFIZU

I．はじめに

『千夜一夜物語』はアラビア語の原典から英語・フランス語・ドイツ語・日本語など諸言語への翻訳を通じて、世界の文学界に確固たる高度な地位を築いた。この説話集が多言語に翻訳されたことが、アラブ文化を巡る新たな視野の創出に貢献した。というのは、『千夜一夜物語』研究に関する多くの著作が諸言語からアラビア語に翻訳されたことが契機となり、『千夜一夜物語』が他国ではどのように理解され、原典がどのように変化したのか、その経緯はどうだったのかが、研究の対象となった。さらに『千夜一夜物語』研究は、中東と西欧との、あるいは中東と日本などアジア諸国との異文化間交流を促した。その上、『千夜一夜物語』の翻訳は文学作品としての他に、芸術の一分野である演劇・映画・アニメなどにも大きな影響を与えた。

本稿では、まず、アラブ世界における『千夜一夜物語』の成立史及びこの説話集の構成と特徴はどのようなものであったのかを、簡潔に明らかにする。次いで、近代・現代日本にあって、『千夜一夜物語』の翻訳史とこの物語が日本人の中東世界イメージをどのように形成したのかを明らかにし、西欧での中東世界イメージとの比較を行いたい。

II．『千夜一夜物語』の成立史及び構成と特徴

『千夜一夜物語』は、イスラム史の中世・アッバース朝時代（750-1258年）に編纂された物語である。文学としては、当時の人々の振舞い、日常生活及び社会的・政治的環境を表す大衆文学に分類される。8世紀から13世紀にかけてのイスラム王朝であるアッバース朝は、他のイスラム王朝に比べれば、ペルシア語やギリシア語の書籍をアラビア語へ翻訳し、物語・詩の創作、さらには音楽や舞踊を含む文化・芸術の黄金時代を築いたと言われる[1]。

『千夜一夜物語』の構造は、それぞれ長編物語及び短編物語に区別され、長編物語の中からさらに多くの枝話を派生させている。その形式の起源はインドやペルシアに由来すると言われる[2]。なぜならば、『千夜一夜物語』はアラブ文学だけを代表するものではなく、社会習俗が発展を遂げたアッバース朝の諸相を描写しているからである[3]。従って、『千夜一夜物語』を作り上げた人々をアラブ民族として一括するのではなく、イラン系やトルコ系などの人々の貢献を視野に入れるべきである[4]。『千夜一夜物語』における非アラブ民族の貢献は説話集自体の価値を上げ、当時のアラブ民族と非アラブ民族の共存及び文化交流を表す。

また、『千夜一夜物語』は一つの書物であるが、9世紀から19世紀に至る長い時間に緩慢な成長を遂げ、口承・書承双方の経路によって民衆の間に伝承されてきたイスラム世界の一大文化遺産でもある。

『千夜一夜物語』の構造は、男女がまくらを共にした時に女性が話す短い物語の集まりであり、シェヘラザードが毎夜物語を語る背景には、男女の性的情景が展開しているのである[5]。説話集のいわゆる「枠物語」のあらすじは、以下の通りである。

昔ササン朝ペルシアにシャハリャールと言う名の勇猛な大王がいた。シャハザマーンという弟がおり、二人はそれぞれの国を統治していた。ある日シャハザマーン王は最愛の王妃が黒人奴隷を相手に戯れているのを偶然目撃してしまい、その場で王妃と奴隷を切り捨てる。兄の所へ出掛けるとそこでまた兄の王妃が黒人奴隷を相手に目を疑うほどあさましい肉体の戯れに酔いしれているのを目撃した。

そのことを告げられた兄シャハリャール王は、それを真実と知ると、失意のもと諸国を巡る旅に出る。そこでも不貞を働く女達を見た彼は、この大地の上に一人として貞淑な女はおらず、女はこの世に生かしておく必要のない生き物だ、と嘆き、夜ごとに処女を求めて夜伽をさせ、夜が明けると殺すようになった。大臣の娘シェヘラザードがみずから夜伽に立候補する。シェヘラザードの話があまりにもおもしろくて、王は殺す事が出来ず、その話は千と一夜にわたって続いた。

われている[10]。

また、宝塚歌劇団の上演作品のもととなったものに杉谷代水（1874-1915）の絶筆『新譯アラビヤンナイト』（上下二冊、1915-16年）がある。三島由紀夫が幼少期に読み、その感銘を記しているものには、中島孤島の『新譯千一夜物語』（1924年）及びその改訳『アラビヤンナイト』（1929年）、『アラビヤンナイト』（1931年）がある。

永峯秀樹の翻訳以来21世紀に入った現在に至るまで、日本の文学者は130年間以上にわたり、『千夜一夜物語』を読むだけではなく、日本文学の様々な作品に活かし続けてきたのである。

第二次世界大戦後の多くの翻訳書のうち、作家たちが作品に生かしたという意味では、大場正史『バートン版　千一夜物語』（河出書房、1966-67年）及び豊島与志雄他『完訳　千一夜物語』（初刊1940-59年）がまず挙げられる。

なお、アラビア語原典からの本格的翻訳が現れたのは、ようやく前嶋信次・池田修の『アラビアン・ナイト』（1966-92年）全18巻（平凡社、東洋文庫）の刊行によってである。東洋文庫版『アラビアン・ナイト』の別巻として、前嶋訳の「アラジンとアリババ」の物語も、アラビア語版から翻訳・出版された。前嶋・池田訳の主たる底本はカルカッタ第二版であるが、ブーラーク版並びにヨーロッパ諸言語への翻訳も注意深く参照されている。

このように、前嶋信次・池田修訳『アラビアン・ナイト』が現れるまで、『千夜一夜物語』のアラビア語原典からの直接訳は存在しなかった。即ち、近代から現代にかけた日本では、西洋からの翻訳書のみが普及し、日本の文学や戯曲は、『千夜一夜物語』のアラビア語原典からの直接の影響を受けることはなかった。

ここで「戦前」とした『千夜一夜物語』の翻訳史は、明治初期から大正後期にかけての初期翻訳と、昭和前期から敗戦までの後期翻訳との二期に分けられる。この時期の翻訳書の原本は、『千夜一夜物語』の翻訳を研究したMia Gerhardtの言うように、ガランの「親のない物語」Galland's Orphan Storiesである[11]。ここでの「親」とは、フランス語訳のガラン版に対するアラビア語原典を意味する。つまり「親のない物語」とは、ガラン版には収録されているものの、その原文をアラビア語原典に見出すことができない物語のことである。

日本における『千夜一夜物語』翻訳の第一期は、永峯秀樹を初め、井上勤や杉谷代水による時代である。この時期の翻訳の特徴は、次のようである。

1 翻訳者は、『千夜一夜物語』の部分訳を行ったが、それらは全体の10%にも達していないものが殆どであった。

2 使用された原文は、殆どガラン版の重訳に基づき、しかも訳者不明の英語・仏語・独語訳のいわゆる「三文文士版」Grub street edition であった[12]。このガラン版も三文文士版も、後にその翻訳の水準の低さが指摘されたものである。従って、それらに基づいた日本語訳の水準も当然低いものであった。

3 レイン版は英語の文体が難解であったため、日本へは翻訳されずに、翻訳の際に参照されるだけに留まった。しかし、日本語訳への翻訳者はレイン版の挿絵には興味を持ち、それだけを訳書に取り入れた。

4 地名及び人名の誤記、文章の意味の誤解などが多い。しかしながら、日本において、これらの翻訳書は、文学者及び一般読者に広く『千夜一夜物語』を紹介し、彼らをこの物語の魅力に引き付けることに貢献した。

近代日本初期において、『千夜一夜物語』を翻訳する底本として利用されたのは、主にガラン版やその重訳であった。その理由はそれまで、アラビア語原典がまだ知られておらず、ガラン版の出現が世の中に劇的な波紋を投げかけたからである。

このように、明治時代における日本語への翻訳は、ガラン版に基づいた英語若しくはドイツ語訳からの重訳であり、これが日本における『千夜一夜物語』の普及及び享受に大きな役割を果した。

さらに、これらの翻訳は、文学及び演劇の分野にも大きな影響を与えた。例えば、巌谷小波（1870-1933）の児童向け狂言「馬盗人」（1906年）及び木下杢太郎（1885-1945）の戯曲「医師ドオバンの首」（1910年）と「十一人の偏盲」（1912年）などは、まさにこれらの翻訳の影響に基づいた作品であるといえよう。そして、文学の分野でいえば、尾崎紅葉（1868-1903）の「やまと昭君」（1889年）や泉鏡花（1873-1939）の「名媛記」（1900年）が挙げられる。

『千夜一夜物語』の日本語翻訳書として、1915年から1933年までに24巻が刊行され、芸術的児童文庫の理想的形態として日本の児童文学史にきわめて大きな役割を演じたものに、菊判・豪華本叢書の「模範家庭文庫」がある。その原テキストとして用いられているのは、杉谷代水（1874-1915）の絶筆『新譯アラビアンナイト』（上下二冊、1915-16年）である[13]。杉谷は、1900年に坪内逍遥（1859-1935）

シェヘラザードは他の女性たちをシャハリヤールの不当な行為から救うと同時に、この千と一夜に亘って語った話の内容が『千夜一夜物語』を構成している。

しかしながら、シェヘラザードにとっては、彼女自身はもとより、生命を脅かされている処女全体を救うだけでなく、運命をはらいのけ、女性的なものの正当な権利を回復させ、いかなるものも女性に打ち勝つことはできない、ということを実証することが課題なのであった。

つまり『千夜一夜物語』は、性の歓びの回復という魔術によって家父長制に打ち勝った架空の物語である。非常に大きな満足を得た後、性的欲望がよみがえったシャハリヤール王は、効果的であらゆる点でイスラムの教えに一致しているフェミニズムに譲歩したのである[6]。

ガストン・バシュラールは、「心理学には、精神分析について語るように、リズム分析について語る場所がある。悩む心、特に閑暇やうつ病に悩む心は、リズミカルな生活によって、リズミカルな思考によって、リズミカルな注意と安息によっていやさなければならない。」といい、リズム分析の視点からシェヘラザードの役割を分析し評価した。彼女は、物語によって人の心を虜にする新しいコミュニケーションの方法を見出し、一種の精神類似療法をシャハリヤール王に実行したのである。

エロスは強制されたり、急がされたり、束縛されたりすることを嫌うものである。幸福なシャハリヤール王は、バシュラールの指摘するように、「多様な世俗生活をうまく調整することによって、われわれの、陽気で、霊化された、詩的な安息が生まれた[7]。」という日常性を回復することができた。『千夜一夜物語』のエロティシズムは、苦悩の廃棄を宣言し、苦悩を乗り越え、生きる歓びの発見を助けることを可能にした永遠の想像力をもつのであった[8]。

このように、『千夜一夜物語』は、読者をエロティシズムのただ中に投げ込むが、それは明瞭な意味を持ち、かつラジカルなフェミニズムを浴びせかける。『千夜一夜物語』は、女性憎悪から、断固たるフェミニズムにいたるまでのプロセスについて、注目すべき論理を展開している。

四、『千夜一夜物語』の日本語への翻訳史概観

翻訳は、異なる母国語に培われた文化と思想とに橋を架けるための重要な手段である。そして、異なる母国語間の文化交流を促進するものでもある。つまり、翻訳により互いに異なる文化を多様な国や地域が理解し合い、人々が相互の文学や演劇等の分野における交流を深めるのである。

本節では、『千夜一夜物語』の翻訳活動がアラブ世界以外の国や地域の文学及び演劇にどのように影響を及ぼし、それが翻訳によって受容した『千夜一夜物語』の理解に、どの程度貢献したのかを概観する。

まず、ヨーロッパ諸言語から訳された『千夜一夜物語』の日本語翻訳を取り扱い、以下の点を明らかにする。

1. 『千夜一夜物語』の日本語翻訳とアラビア語原典とは、どのような類似点と相違点があるか。
2. 『千夜一夜物語』の日本語翻訳はヨーロッパ諸言語から翻訳されたが、アラビア語原典にどの程度忠実な翻訳であったのか、忠実でなかったのか、またアラブ・中東文化がその中でどのように紹介されたのか。
3. 『千夜一夜物語』の日本語翻訳は、日本の近代・現代演劇にどのような波紋を投じたのか。

なお、本節では、『千夜一夜物語』の全ての日本語翻訳書を取り扱うのではなく、近代日本における初期翻訳書と、第二次世界大戦後の重要な完訳書のうち、ヨーロッパ語の訳書及びアラビア語原典に、より忠実でかつ日本人の作家たちが講読し、大きな影響を受けたものを取り上げることにする。なぜなら、私の研究テーマである日本の現代劇作家たちは、このような翻訳書を通して『千夜一夜物語』を知り、その内容を自らの作品に応用したからである。

『千夜一夜物語』の翻訳史を概観するにあたって、第二次世界大戦の戦前期と戦後期という時代区分を設ける。なぜならば、戦前と戦後では、日本の社会的通念や政治・法制度の違いなどによって、『千夜一夜物語』の扱われ方が異なったからである。既に先行研究として、杉田英明が戦前から戦後にかけての『千夜一夜物語』翻訳史の重要な論点を明らかにしているので、以下それを参照しながら記述する。

1. 第二次世界大戦前の翻訳とその歴史的背景

『千夜一夜物語』の日本語への翻訳で重要なものを挙げると、永峯秀樹の『開巻驚奇　暴夜物語』(1875年)が最初の日本語訳であり先駆的な仕事であった[9]。次に、井上勤訳の『全世界一大奇書』(1883年)が、泉鏡花・木下尚太郎をはじめ戦前の作家たちに影響を与え、彼らの作品のモチーフに使

の推薦で富山房の編集部に入っている[14]。

さて、次に昭和前期から第二次世界大戦までの「戦前」期をみると、この時期の『千夜一夜物語』の翻訳の特徴は以下のようである。

1 レイン版が一次底本として利用され、殆どその完訳の形をとっている。
2 マラブ社会の風俗・習慣や物語の類話に関する詳細な注が付されており、民俗学及び物語文学に興味を抱く読者にも役立つものとなっている。
3 翻訳者がアラビア語原典を直接参照できなかったために、文章の加筆・省略・誤解及び人名や地名の間違いが存在する。

まず、中島孤島の翻訳書を取り上げる。杉谷訳の翌1916年、同じ「模範家庭文庫」の第三冊として『グリム御伽噺』の訳を刊行した中島孤島もまた、児童向け『千夜一夜物語』普及の上で、大きな貢献をしている[15]。

中島孤島（1878-1946）は、杉谷と同様、坪内逍遙門下の早稲田大学英文科の出身者であり、以後も、同叢書執筆陣の多くを同門の人々が占めている。中島孤島は『新譯千一夜物語』（1924年）を出版し、5年後には『アラビヤンナイト[16]』（1929年）、さらに1931年にはカラー挿絵入りの『アラビヤンナイト』（誠文堂版の〈世界童話大系〉普及版）へと発展させてゆくことになる。

この『新譯千一夜物語』の増補版ともいえるのが、近代社〈世界童話全集〉の一環として1929年に刊行された中島孤島訳『アラビヤンナイト』である。

同書末尾の「アラビヤンナイト解説」で、孤島は、この説話集の成立やヨーロッパへの紹介の歴史を簡単に概観したのち、原本について次のように述べている。

> 「アラビヤン・ナイト」は本來大人の讀み物に編られた奇談集で、どうしても童話にはならないやうな話も隨分あるのです。そこで譯者は讀者の意向を考慮して、レーンの英譯本のうちから、成るべく代表的な、面白さうな話を選び、話の數を殖すよりも寧ろ一つ一つの話を詳しく叙述して行かうといふ方針を定めました。
> 又一方では、本全集の通俗な性質と童話といふ目的とを眼におかなくてはなりませんので、學者的なレーンの譯文に色をつけるために、この種類の諸本を參照し、特に多數の插畫を加へて、本文と相俟って讀者の興味を添へるやうに苦心しました[17]。

この文からは、あくまでもレイン版が底本とされ、そこから「代表的な、面白さうな話」のみが選択されたような印象をうけるが、実情は必ずしもそうではない。レイン版は副次的に利用されたにすぎず、むしろメイソン版―孤島の言う「通俗な流布本」の冒頭からの一つ一つ、一冊分の分量を抜き出したのであった。ただ、同版とレイン版との併用が、「一つ一つの話を詳しく叙述して行かうといふ方針」に基づいていることは確かであろう[18]。

孤島の訳文は、原典と比較した場合、細かな補いや小さな誤解・誤読の類はあるが、全体として正確かつ平明で、よくこなれた日本語に仕上がっている[19]。

1929年版と1931年版を比較すると、1929年版では日本ではもっとも有名な「アリ・ババと四十人の盗賊の話」と「船乗シンドバッドと荷擔ぎシンドバッドの譚」「アラヂンの譚」が収録されておらず、1931年には上下版の形で収録されている。

この〈世界童話大系〉本に強い印象を与えられたのが、のちの作家・三島由紀夫（1925-1970）の少年時代の平岡公威であった。三島は戦後の1966年に戯曲『アラビアン・ナイト』を発表・上演しているが、それに触れた文章の中で次のように回顧している。

> 子供のころ中島孤島譯の「アラビアン・ナイト」を讀んで、忘れがたい感銘を與へられたが、この本には、子供に讀ませていいのか、とびつくりするやうな插話（たとへば、プロロオグの王妃の姦通譚や、黑島の王子の物語）も、堂々と入れられてゐた。かういふ刺戟派好みの插話が、いかに私の文學的空想力を培ったかは、「岬にての物語」といふ短編小説の中にも書いたとほりである[20]。

日夏耿之介（1890-1971）の翻訳『アラビアン・ナイト』（1932年）もあるが、これはレイン版の完訳の形で13冊からなっている[21]。日夏は、井上勤の訳書を講読し、レインの英訳の重訳に取り掛かったが、関東大震災や予期せぬ病の影響を受け、満足するものを完成させることができなかった。日夏訳には初歩的な誤訳が多く、しかも、レイン版の注釈を省略しているため、一般読者には、[illegible]になる部分があると、杉田英明が指摘している。

森田草平（1881-1949）の訳書『千一夜物語』

1926-30年）はレイン版を原本として使い、4巻で刊行された。単純な数字の取違いや小さな脱落、イスラム風習にまつわるわずかな誤解などを別とすれば、森田訳はきわめて正確で、高水準の訳である[24]。

レイン版を第一次原本として使用した点において、日夏と森田の翻訳書は学術的価値の高いものである。なぜなら、レイン版は、従来のガラン版系統の訳書と異なり、1835年にカイロで刊行されたエジプト校訂版である「ブーラーク版」に基づく学術的かつ良心的な翻訳であったと言われるからである。レイン版は「ブーラーク版」の全体の5分の2ほどの抄訳である[25]。道徳的観点からの削除や改変が見られるという点では原典の全貌を伝えたとは言いがたいが、『千夜一夜物語』の味わいを知るには手頃な分量に抑えられ、かつ青少年にも安心して勧められるという利点があった。

森田は、レイン版にある道徳上の省略を前もって批判していた。つまり、彼は、「凡例」で「なほ第卷の『第一王子托鉢僧の話』の中では、一人の王子がその妹と不倫の愛に陥つたとあるのを、譯者はその乳兄妹と愛に陥つたと變へてゐる。（中略）若しこれ等の省略も變化もない飜譯に接しようとすれば、前世紀の末にバアトン倶楽部の會員にのみ配本されたリチャード・バアトンの譯書に據るほかない。」と述べている。さらに、次のようにも言っている。「しかもそれは公刊の書物でないから、滅多に吾々の手には入らない。偶々手に入つてそれを飜譯して見た所で、我國の現狀にあつては到底それを出版することを許されないのは、讀者も夙に御承知の通りである[26]。」

要するに、森田は、バートン版の原文により忠実な翻訳を考えていたが、当時の日本社会の道徳規範を意識し、直訳相談の設定などを避けるため、原文に忠実ではないと考えていたレイン版に拠らざるを得なかった（ただし、挿絵に関しては、友人の芥川龍之介が所蔵していたバートン版を借りて、訳書に転載した）。

しかし、森田の考えに反し、実際にはバートン版は原文に忠実ではなく、性的描写を加筆している。その影響で、バートン版を講読していた芥川は『千夜一夜物語』に好色文学のイメージを抱いた[27]。

以上のように、戦前に出版された『千夜一夜物語』の翻訳書物は、殆どガラン版とその英文重訳及びレイン版が原典とされている。ガラン版はフランスの上流階層向けであり、猥褻な箇所が全て省略された。それと同様、レインも18世紀のビクトリア時代の紳士であり、猥褻な箇所に手を加えたり、省略したりした。その結果、レイン版とガランの英文重訳版のみを原本として訳された日本語訳では、「シンドバッドの物語」及び「アリ・ババの物語」、「空飛ぶ絨毯」などの御伽噺や冒険譚ばかりが紹介されることとなった。さらに、大正デモクラシーによる民衆の影響力が強まった政治的・社会的風潮が重なったため、政治的風刺を表す「医師ドオバン」のような物語が盛んに取り上げられた。

2．第二次世界大戦後の翻訳とその変遷

第二次世界大戦後になって、『千夜一夜物語』の日本語訳には、バートン版とマルドリュス版原典の完訳が登場した。すでに、戦前においてもバートン版とマルドリュス版の翻訳が行われていたが、これらの出版は、厳しい検閲制度のため、極めて制限されたものになってしまった[28]。

そもそも戦後初期から、ヨーロッパ諸言語の原典と共にアラビア語原典も知られるようになっており、さらに、それまで頻繁に訳されてきたガラン版系統の歪曲が明らかにされ、同版の『千夜一夜物語』がアラビア語原典と関係の薄いことが知られてきていた[29]。

戦後初期において、バートン版とマルドリュス版がアラビア語原典の直接訳として大いに評価されたのは、この2版が純粋なアラブの郷土的表現に富み、種々の見地からして最も完全なものであるからだと、大場正史は指摘した。そして、翻訳者らは、『千夜一夜物語』の起源も深く探るようになった。例えば、大場は、9世紀のマスーディの『黄金の牧場』（Muruuj al-Dhahab）と10世紀のイブン・ナディームの『目録書』（Fehrest）という書物が、『千夜一夜物語』に言及している事例を指摘した[30]。

バートン版とマルドリュス版の完訳が現れるまでは、『シンドバッド』や『アリ・ババ』、『アラジンのランプ』などの比較的受け入れやすい冒険譚が一般化されていた。しかし戦後になってから、日本の翻訳者らによって『千夜一夜物語』に対する従来の鑑賞方法や認識を改める必要があると主張され始めた。

しかしながら、バートンやマルドリュスを初めとする西欧の東洋学者が翻訳した『千夜一夜物語』は、どこまでがアラビア語原典に忠実で、信頼性があるのかが問われるべきであった。そして、その西欧言語の翻訳に基づいた日本語訳の信頼性も検討しなければならないのである。そこで、バートン版とマルドリュス版の代表的な日本語翻訳をいくつか検討してみよう。

4 豊島与志雄ら訳の『千一夜物語[30]』(岩波文庫版)

この翻訳書は全てマルドリュス版からの重訳である。1940-45年の初刊が26冊から成り、その後の新版と改版が13冊から成っている。豊島与志雄など訳者四人が翻訳を担当した。初刊は1940-45年の間に出版されたが、戦中版は風俗的見地から無数の恋愛描写削除を強いられ、アラビア語版の大らかで素朴な表現が消え、物語の魅力が大きく失われた。戦後の部分になると、すでに削除された部分を含め、新たな翻訳による出版活動が始まった[31]。

新版『千一夜物語　マルドリュス版完訳』が出版された1982-83年以降の特徴としては、物語の恋愛描写が原典通り自由に表現されたこと、文庫刊行20年間に修正された地名・人名の表記とアラビア語式表現の不統一や混乱を改めて整理統一したこと、さらに読者に馴染みの薄い古風な表現や漢語を理解しやすい言葉に改めたことなどが挙げられる。

1940年版の訳者一同の「はしがき」では、「『千一夜物語』はすでに世界中の万人の所有物であって、各国語による各種の翻訳が流布している。その中でもマルドリュス博士のフランス語訳は、アラビアの原典の面影を最も完全に伝え、最も信憑できるものとされている。」と述べられている[32]。すなわち、訳者らは、マルドリュス版が最もアラビア語原典に忠実な文献であるからこそ、それを翻訳したと強調している。

マルドリュス（Joseph Charles Victor Mardrus）（1868-1949）はカイロで生まれた伝染病医であった。彼は、アラビア語原典のエジプト校訂版「ブーラーク版」（1835年）を利用した。マルドリュス版の第一巻の「解説」で述べているように、マルドリュスは「ブーラーク版」を底本としたが、「第二カルカッタ版」も「ブレスラウ版」も、時には写本などをも補部の材料として利用し、独特の『千夜一夜物語』を編集したと言及している[33]。

マルドリュスは『千夜一夜物語』の翻訳を初め16巻で刊行し、続いて同じ書肆から8巻の絵入り本を出した。8巻版にはペルシアとインドの写本の彩色のミニアチュールと本文の縁飾りがそのまま写された。なお、8巻版は16巻版より多くの場面が書かれている。

豊島与志雄らは、16巻版を原本とし、所々で8巻版による補足を行いながら、岩波文庫版の翻訳を完成させた[34]。その後、佐藤正彰は8巻版の翻訳を『千一夜物語』の表題で筑摩書房の『世界古典文学全集』中の全4巻で出版した[35]。

岩波文庫版の「解題」で佐藤正彰は、マルドリュスが利用した『千夜一夜物語』の原本、起源、諸写本及び欧米諸言語翻訳書を学術的に概観した。佐藤は『千夜一夜物語』の原本が、版によって説話の数も配列も異なることに注目している。

しかし、諸版に共通しているのは「序話」であり、それが「枠物語」となる。『千夜一夜物語』は、その枠物語の中へ際限なく挿話と枝話を挿入してゆくという、いわゆる枠物語形式をとっている[35]。この枠物語形式の起源は、インドにあり、早くペルシアに伝わり、ペルシア化されたらしいと『千夜一夜物語』の研究者が言及している。さらに、佐藤は『千夜一夜物語』をめぐるヨーロッパ語の諸翻訳書について『ラルース百科事典』を辿り、学術的に『千夜一夜物語』の翻訳史を追究した[36]。この学術的な翻訳史の追究は、『千夜一夜物語』の戦後翻訳の特徴の一つであると考えられる。

マルドリュスの16巻版には、各巻の表紙に「アラビア語原典の完全な逐字訳」と表記されていた[37]。佐藤は、「逐字訳は彷徨する精神をつなぎとめてこれを抑制するとすれば、すさまじい安易なペンの運びをも引き止める[38]。」と、この「没我的逐字訳」の優れた側面に言及している。マルドリュスの「没我的逐字訳」の技法を凄いと思って信頼したのは、豊島与志雄らの翻訳者だけではなく、フランスの文学者や思想家なども大いに注目し関心を寄せ、高く評価していた。例えば、フランスの有名な小説家アンドレ・ジード（1869-1951）はマルドリュスの訳について、「一つ一つの話にその完全な生来の価値を再び与えて、一民族の思想自体のうちに、その自然と読者を引き込み、魅力するという作家的能力を持つ翻訳者として評価の高い仕事である。」と褒めている。

このように、フランスの知識人と共に、日本の知識人もマルドリュス版が「アラビアの原典の面影を最も完全に伝え、最も信憑できるものとされている。」と信じて疑わなかった[39]。

しかしながら、事実は知識人の思った通りではなかった。杉田英明の研究は、マルドリュスの作品には粉飾が多く、独自に外部から物語が持ち込まれたことを明らかにしている。

マルドリュスが原本にしたとされるアラビア語原典（ブーラーク版）と照合すると、様々な問題が浮上する。マルドリュスは独自に、ガランが発見し在しアラビア語原典に見えない、いわゆる「孤児物語」orphan stories を外部から持ち込んだ。従って、マルドリュス版には、ブーラーク版原典に

対応しない物語や表現が散見される。また、対応する物語が原典に掲載されてはいるものの、マルドリュスによる加筆で、既に対応する文章や語句が原型を留めていない箇所も少なくない。例えば、「創造主の祝福したまふ國[41]」は主人公が行軍の末に到着した美しい牧草地を形容しているだけであるが、アラビア語原典では「泉は滾々として湧き出で、果物は枝もたわわに熟し」、「あたかもこの世の楽園のごとく」と具体的記述になっている[42]。

そして、マルドリュス独自の挿入や加筆の箇所は、岩波文庫版にそのまま翻訳されたのである。例えば杉田英明が発見したように、岩波文庫版の第三巻所収の「オマル・アル・ネマーン王とそのいみじき二人の王子の物語」の枝話「美しき奴隷ノザタン」Nozhatou（ヌズハトッ・ザマーン）がシャルカーンに語る「教王オマル」の正義の逸話や、大臣ダンダーンがダウールマカーンに語る五人の娘の進講の逸話は、アラビア語原本のブーラーク版と異なる。そして、五人の娘を率いてきた老婆が国王に与える訓言「自らを知る事を学び給へ、而してそれ迄は何事をも為す勿れ。」といった教訓自体はアラビア語原典には存在しない、マルドリュスによる創作であった[43]。即ち、マルドリュス版による加筆がそのまま岩波文庫版に移ってしまった。

従って、マルドリュスの訳を賛美し、権威付けたフランス人文学者及び日本の翻訳者は、マルドリュス版をそのまま信頼した結果、アラビア語原典の『千夜一夜物語』と異なるものを読者に紹介してしまったことになる。

本論文とは別に取り上げるが、この岩波文庫版の影響を強く受けた寺山修司は、アラビア語原典の『千夜一夜物語』に存在していない多くの箇所を彼の作品に利用してしまった。寺山修司はマルドリュス版訳の『千夜一夜物語』を読み、『絵本・千一夜物語』と戯曲『新宿版　千一夜物語』を書き上げた。これらの作品の中で、説話集の官能的場面や空想を誇張して描いているのである。

このように、マルドリュス版による独自の挿入や加筆が、そのまま移ってしまった結果、岩波文庫版『千夜一夜物語』は、アラビア語原典と違った形で描かれた部分を含んで仕舞ったのであった。

③ 大場正史訳の『バートン版　千夜一夜物語[44]』（河出書房及びちくま文庫版）

これはバートン版の完訳であり、版によって、それぞれ、全11巻、全12巻、全8巻として出版された[45]。大場は、角川文庫版出版の10年後、河出書房より出版した際には、角川文庫版本文にさらに彫琢を施し、原註も二割程度増やして訳出した。そして、『補遺』からの抄訳は第8巻にまとめ、古沢岩美（1912-2000）のカラー及び単色の口絵・挿絵を付している[46]。

大場正史の角川文庫版が出版される以前に、戦後最初のバートン版完訳の試みとして、全7巻の予定で刊行が始まった斉藤三夫訳『バートン版　アラビア千一夜物語』（東西出版社、1948-49年）がある。これは、結局第1巻しか出版されなかった[47]。

ペイン版は[48]、『千夜一夜物語』のアラビア語の原典に比較的に忠実に訳されているが、500部のみの出版に限定され、さらに完訳できなかった事情があるので、幾つかの問題を孕んでいた。一方、バートン版は、夥しい数の注を含む『千夜一夜物語』原典の正確な完訳、模範的訳書として珍重され、高い支持を獲得したのであった[49]。なぜなら、バートンは説話集を通してアラブ人の生活や風俗・習慣などを巧みに追究したので、当時のイギリスの植民地政策を形成するのに重要な書物となった。

大場正史には、エドワード・レインの民俗学的研究書である『近代エジプト人の風俗と習慣[50]』（1964年）を訳した経験があることは言うまでもない。

大場は、バートン版の原注を全て訳出し、同時に各巻の『解説』若しくは『訳者のあとがき』において、主にバートンの情報を参照し、各物語の概略、アラブ人の風俗や習慣、『千夜一夜物語』の起源、そして、イスラム教の風俗などを解釈しようと試みた[51]。その中で、大場は『千夜一夜物語』の性質について、次のように語っている。

> これは、『千夜一夜物語』ががんらい読むために書かれた物語でなく、話し手が暗誦して人々に聞かせる物語であったところから、前に話した物語のディテイルを忘れて、前後の矛盾を犯すにいたったのである。近世にはいっては『千夜一夜物語』をはじめ、『アブー・ゼイド一代記』Seeret Abou-Zeyd『エズ・ザヒル一代記』Seeret Ez-Zahir あるいは『アンタル物語』なども刊本になっているが、それでも、これを暗誦して聴衆を喜ばせる職業的な講釈師はやはり存在している。『アブー・ゼイド一代記』の講釈師はショアラと呼び、『エズ・ザヒル一代記』のそれはモハディット、『アンタル物語』や『千夜一夜物語』あるいは『ブレーメー一代記』などのそれはアナティレーと呼ばれている

もので、同じ講釈師でも専門的に分化している[52]。

上記の記述における「モハディット」とは「語り者」「ムハッディス」(muhaddith)、「デレーメー一代記」とは「デルヘンマ物語」Dhat al-Himma（ザート・アル＝ヒンマ物語）、「アナティレー」とは「アナーティラ」Anatira（「アンタル」の複数形）のことである。これらの矛盾は物語の性質上、むしろそのままにして合理化しないほうが自然で、愛嬌があるように思われるのである。

大場正史は、このように『千夜一夜物語』の重要な特徴として「口伝の物語」(Story-telling) という性質や、物語を聴衆に朗誦する「ラーウィー」"raawii" という講釈師がいることを取り上げている。

「口伝の物語」の伝統は日本の文化においても、鎌倉時代にはすでに普及して一般に親しまれ、さらに江戸時代には「落語」「講談」などの形で、さらに華やかになっていた。なぜならば、いわゆる「口伝の物語という芸術」(Art Of Story-Telling) が、日本の物語においても既に普及し親しまれていたからである。例えば『平家物語』のような、盲目の琵琶法師が仏教の因果観・無常観を琵琶を弾きながら「平曲」として語る軍記物語、謡曲・浄瑠璃以下の後代文学などが、日本の文学世界において多大な影響を与えたという経緯があるからである[53]。

従って、「口伝の物語」*Story-Telling* は日本ではとても親しみ深く受け入れ易いものであった。これは、『千夜一夜物語』が日本で親しまれた重要な要素として挙げられる。それに日本の大衆文化の中に見られる説話と、『千夜一夜物語』の説話との共通性も指摘できる。

そして、大場が述べたもう一つの『千夜一夜物語』の性質としては、好色性が挙げられる。

がんらい『千夜一夜物語』は当代の社会習俗一般をありのまま鮮やかに描写しており、その意味では東洋独特の典型的な風俗文学といってよい。だから、男女のむつごとも、濃厚なラブシーンも、濡れ場も、見明に描かれ、いろいろなシチュエイションにおかれた愛欲の諸相が美しく浮きぼりされているわけである。（中略）

アラブ人はがんらい砂漠のただ中で、大自然の脅威と戦いながら生きぬいてきた種族であるから、もともと五感は鋭く発達し、非常に官能的な快楽や美に動かされやすいのである[54]。

バートンは、このようなアラブ人の官能性について「自然な人間は自然なものをとがめない」からと言及している。そして、バートンの考えを受け継ぐ大場は、『千夜一夜物語』の愛欲場面の描写について、砂漠の自然の中に生きるアラブ人の官能性に由来すると考えているようである。即ち大場は『千夜一夜物語』の素朴な愛欲場面の描写を通じ、アラブ人が生まれつき官能的な特質を持っていると一般化した見方をしている。

このように大場は、バートン版の『千夜一夜物語』及び西欧の学者によるアラブ・中東関連研究を通して、アラブ人に対する西欧文化の視点を受け継ぎ、中立性に欠けた観点を形成したことは否定できない。

しかし、イギリスの東洋学者 Orientalist であるレインとバートンの観点をそのまま受け入れたのではなかった。大場は、『千夜一夜物語』における好色的で官能的なオリエントといったステレオタイプを受容しただけではなく、日本古典の伝統にみられる、官能的特質を肯定的にとらえる伝統的文化をも念頭においていたと思われる。

ただし、大場の翻訳には、バートン版の所々に見られる誤訳・誤植をそのまま踏襲したため、物語を理解しがたくしている箇所が見受けられる。例えば、バートンは「シンドバッド王と鷹の話」で、アラビア語原文の人称代名詞 "quddama-hu" を、「自分自身の前」が正しいのに「鷹の前」と誤訳しており、この誤りを踏襲し、大場も「鷹の前」と訳してしまっている。さらに、バートン版の英訳自体を読み間違えた箇所もみうけられる。大場訳は、いずれも英訳原文のまま訳したため、文章の意味がとりにくい個所を含んでいるのである[55]。

ただし、中東世界やイスラム、アラビア語などに関する信頼できる参考資料があまり存在しなかった当時の状況を考えれば、これはやむをえないことであったかもしれない。バートン版の理想的な翻訳のためには、やはりこれらの専門的知識を持った訳者の存在が不可欠であるといえる。

とはいえ、『千夜一夜物語』に興味を持った多くの戦後の作家は、大場正史の翻訳本を読んだ。その中の一人である三島由紀夫の蔵書リストにも大場正史の翻訳書のいくつかの巻が載っている。そして、大場版が出版された1960年代、三島は大場の翻訳をもとに、戯曲『熱帯樹』（1960年）及び戯曲『アラビアン・ナイト』を書き上げた。また井上靖も、この翻訳を参照して、『絵本・千夜一夜物語』（1968年）及び戯曲『新宿版 千夜一夜物語』を

させた。

大場正史版を読んだ日本人の作家らは、この訳の誤訳や誤植で説話集を誤解したところがあり、アラブ文化のイメージを混乱に陥しめたことは言うまでもない。これらの誤解と混乱を踏まえた日本の作家らは、『千夜一夜物語』の訳を受容して自身の作品にどのように応用したのかについては、IVで概観する。

③前嶋信次・池田修訳の『アラビアン・ナイト[58]』（東洋文庫版）

前嶋信次（1903-83）と池田修（1933年生まれ）によって、『千夜一夜物語』アラビア語原典からの唯一の日本語訳が仕上げられた。明治時代以降、日本におけるすべての『千夜一夜物語』の翻訳はヨーロッパ諸言語訳経由でなされてきた。戦後になってしばらく経ってようやく、前嶋信次による説話集のアラビア語原典からの直接訳が徐々に出版され、1966年から1992年という長期間をかけて、前嶋信次と池田修が、この訳を完成させる。

前嶋は、底本としたアラビア語原典にカルカッタ第二版を挙げているが、そのほか、ブーラーク版、ブレスラオ版、そしてヨーロッパ諸言語による翻訳（特にドイツ語のレットマン版）にも依拠している[59]。

前嶋信次は東京帝国大学の卒業送別会の時、すでに『千夜一夜物語』に関心を持ち、アラビア語原典から翻訳する希望を述べていた。その後、翻訳を決意した前嶋は、アラビア語原典版とヨーロッパ諸言語による各翻訳書、参考資料を揃えて、翻訳作業に取り掛かった。1966年7月、訳者62歳の時に第1巻を出版し、以後足掛け16年間をかけて、第12巻までを翻訳し続けた。死後の1985年には、遺稿に基づいた別巻「アラジンとアリババ」も出されている。第5巻までは順調に、ほぼ半年に1冊の割合で刊行していたのだが、第6巻との間に4年間の空白がある[60]。

前嶋の死後にその訳業を引き継いだのが、池田修である。池田は、1985年に第13巻を出し、1992年に最後の18巻をと、6冊を足掛け8年で完結させている[61]。

杉田英明が指摘したように、前嶋訳『アラビアン・ナイト』をみると、三つの問題が浮かんでくる。第一は、底本の決定についての問題である。前嶋は、主本として拠ったテキストにカルカッタ第二版を挙げているが、カルカッタ第二版には、意味を取りにくい箇所が多く、実際には随所で副本であるブーラーク版やベイルート版の訳を採用していたのである[62]。

第二に、訳文における訳者の加筆や脱落の問題がある。前嶋は訳書第一巻の「まえがき」で、「一言一句たりとも勝手に増減することを避けた[63]。」と述べているが、実際には原文にない語句の付加や、不注意による語句の訳し忘れがかなり見られ[64]、しかも猥褻な箇所を省略している[65]。例えば、前嶋は「大臣ヌールッ・ディーンとシャムスッ・ディーンの物語」における息子のハサン・ヌールッ・ディーンが従妹と性交した場面を第一刷から省略したが、第二刷で付したことがあった[66]。

第三に、翻訳に際し、先行するヨーロッパ諸言語訳、特にリットマン訳に引かれすぎ、その誤訳を踏襲したり、原典にない語句を付加する結果になったりする場合が多かった[67]。そもそも、前嶋の『アラビアン・ナイト』観には、アントワーヌ・ガランからエドワード・レインに至るヨーロッパの東洋学者たちの見解をそのまま踏襲した側面があった[68]。

前嶋の死後、その訳業を引き継いだ当時の池田修は、大阪外国語大学教授、アラビア言語学・文学の専門家で、その任に最も適した研究者であった。池田訳の特徴は、語学的に正確な解釈に基づいており、客観的・即物的な翻訳という点に見出される。前嶋が文章の装飾性、各巻ごとに詳細な「あとがき」を付したのに対し、池田は寄り道をせず、何よりも全巻を訳し終えることに最大の目標を置いていたような趣がある[69]。

前嶋・池田によるアラビア語原典『千夜一夜物語』からの翻訳版を活用した、新たな文学作品や戯曲の制作、新たな中東世界のイメージ形成は、今後に委ねられている。

Ⅳ.『千夜一夜物語』の翻訳による中東世界のイメージ―むすびにかえて―

明治前半の『千夜一夜物語』の日本語訳の底本は、ガラン版とその重訳、それにレイン版であった。つまり、日本人はヨーロッパ諸言語の翻訳を通して、『千夜一夜物語』を知ったのである。このような翻訳の結果、『千夜一夜物語』は、第二次世界大戦の戦前から戦後にかけて、日本における舞台芸術、映画、児童文学などのあらゆる分野で広範囲に普及し、児童文学としての『アラビアンナイト』の特色が影響を及ぼしていった。

戦前の日本では、『千夜一夜物語』のバートン版とマルドリュス版が知識人に知られていたが、この

2版には、性的描写に関する加筆が多いという問題があった。そのため、芥川龍之介を初め多くの文学者や翻訳者らは、『千夜一夜物語』に好色文学のイメージを受け継いでいた。そして、この性的描写の多数は、この2版の自由な出版活動を妨げる要因ともなった[10]。

戦後になると、この2版の日本語訳書が広く普及したため、大衆の間にまで『千夜一夜物語』に好色文学のイメージが広まっていった。要するに、戦前の児童文学として取り扱われた『千夜一夜物語』は、戦後になってから大人向けの好色文学として知られるようになった。アラビア語の原典にはない文言を創作・加筆したバートン版とマルドリュス版は、『千夜一夜物語』の原典から乖離して逸脱した部分を拡大させる結果となった。

一方、バートン版とマルドリュス版は、英仏の一般読者に歓迎されて、その普及に大成功を収め、彼らの訳書はアラビア語原典に忠実であるとして、そのまま信用された。従って、この二つの版に存在している官能的で猥褻表現の多数が、原典自体の特徴だと考えられ、「ハーレム」「四人妻」といった決まり文句に代表される「官能的オリエント」という見方が強調された。

そしてこの見方は日本にも移入され、『千夜一夜物語』における好色的で官能的オリエントといった西欧的ステレオタイプを受容しただけではなく、日本の伝統に結びつけて肯定的にとらえられた。例えば、岩波文庫版の『千夜一夜物語』の表紙をみれば、全13巻の中で第4巻、第7巻及び第11巻以外は全て官能的な表紙であって、大場正史もバートン版を通して、イスラム・アラブ地域における「ハーレム」「四人妻」など、さらに官能的な風俗文学としての『千夜一夜物語』のイメージを受け継いだ。ただし、説話集が形式と内容の面で、アラブ世界の崇高な大衆文学であることは評価した。

確かに、アラビア語原典の『千夜一夜物語』にも、性愛の描写は存在しているが、バートン版とマルドリュス版は、さらに猥褻な場面を挿入し、好色文学としての『千夜一夜物語』のイメージを膨らませたのである。

こうしたバートン版・マルドリュス版に依拠した戦後日本の『千夜一夜物語』の翻訳の特徴には、次の4点が指摘できる。

1 バートン版とマルドリュス版が底本とされ、これに基づいて、日本語の完訳が徐々に刊行された。
2 『千夜一夜物語』の好色文学のイメージが強調された。
3 バートン版とマルドリュス版における挿入と誤訳はそのまま日本語訳に踏襲された。
4 恋愛描写や性的描写をふんだんに盛り込んだこの2版からの翻訳によって、それまで児童文学として受け入れられていた『千夜一夜物語』は、大人向けの好色文学へと変貌した。

全体的にみれば、日本では、猥褻本・好色文学としての『千夜一夜物語』観が現在に至るまで広く一般に流布している。戦後の日本作家たちも、殆どバートン版とマルドリュス版の日本語訳を講読し、自身の作品にその視点から『千夜一夜物語』の要素を取り入れた面が見られる。

注

1) Al-majalla al-'arabiyya lil' uluum al-Insaniyya. al-Mujalad al-Thanii. al-'adad al-Sabi'. Kuwait UP., 1982. pp. 25-43。
2) 大場正史「『千夜一夜物語』に現れた性愛」「解説」『バートン版　千夜一夜物語 1』河出書房、1966-1967年、p.546
3) バートン版の選集（1951年ポケット・ブックス）を編集した米国のP.H.ニュービーは東洋（といっても中近東）人だと述べている。大場正史、前掲書、p.547。
4) 杉田英明「イスラムの文明論へ」、『日本人の中東発見：逆遠近法のなかの比較文化史』東京大学出版会、1995年、p.40。
5) M. Yunus, "Nisaa' al-Qaṣr fī Alf Layla wa Layla". Majalat Wijhāt Nazar. August 2006、pp. 9-15。
6) ブーディバ「『千夜一夜物語』の多面性」『イスラム社会の性と風俗』桃源社、1980年、pp.66-67。
7) G. Bachelard, La dialectique de la duree,「リズム分析」『持続の弁証法』掛下栄一郎訳、国文社、1976年、pp.185-87。
8) ブーディバ前掲「『千夜一夜物語』の多面性」pp.69-70
9) 永峯秀樹『開巻驚奇　暴夜物語』彫刻舎社、1975年。
10) 井上勤『全世界一大奇書』報告堂、1883年。
11) H. Sugita, The Arabian Nights and Orientalism. Ibid. p. 128. Mia I. Gerhardt, The art of story-telling: a literary study of the thousand and one nights. Leiden : Brill. 1963. p. 16。
12) 杉田英明「『アラビアンナイト』翻訳事始　明治前期日本への移入とその影響」『外国語研究紀要』東京大学大学院総合文化研究科、第四号、1999年、p.10
13) 杉田英明「児童文学としての『アラビアンナイト』大正・昭和前期を中心に」『外国語研究紀要』東京大学教養部、7・8合併号、2004年、p.14。杉谷代水『新譯アラビヤンナイト』昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第15巻、昭和女子大学光葉会、1960年、p.365-399。新田義之「杉谷代水と児童文学」『比較文学研究』

第1号、1[illegible]年[illegible]月、p.17-29.

14) 伊藤氏代表編『新譯アラビヤンナイト』p.369

15) 杉田英明前掲稿、2004年、p.24。中島孤島については、[illegible]女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』58、[illegible]女子大学近代文化研究所、1986年、p.289-354。『グリム童話集』の標題は、奥付では「グリムお伽噺」と表記されている。

16) 中島孤島「アラビヤンナイト」『世界童話全集』近代社、1929年。

17) 中島孤島前掲「アラビヤンナイト」p.579。

18) 杉田英明前掲稿、2004年、p.27。「通俗教育」「通俗文」などの用法からも窺われるように明治・大正期の「通俗」という言葉は、現代のような否定的・侮辱的な意味ではなかったらしい。『日本国語大辞典』（第二版、小学館、2001年）の「通俗」の項には「特にその方面の知識がない人でも、わかること。専門的でなく、だれにでもわかること」の字義が挙げられている。中島孤島の言う「通俗な流布本」とは、「学者的」で専門性の強いレイン版に対し、一般読者向けに書かれた普及本といった意味であろう。「二三の」とは「アリババ」邦訳で副次的に利用したディーエル版を念頭に置いた表現かもしれない。

19) 杉田英明前掲稿、2004年、p.25。

20) 三島由紀夫「アラビアン・ナイト」『婦人画報』第七百五十七号、1967年2月、p.136-137（招待席）。写真は細江英公。のち、『三島由紀夫全集』第三十二巻、新潮社、1975年、p.530所収。なお、三島由紀夫と『千夜一夜物語』との関連については、北功「三島由紀と千夜一夜物語」『1998-1999学生論文集』東京大学教養学部、1999年、pp.145-154。

21) 日夏耿之介訳『アラビヤン・ナイト』全13冊、春陽堂、1932年。

22) 杉田英明前掲稿、2004年、p.49-52。

23) 森田草平訳『千一夜物語／エドワード・ウィリアム・レーン英譯』國民文庫刊行會、全四巻、1926-1930年。

24) 杉田英明前掲稿、2004年、pp.47-53。

25) 森田草平、「凡例」『千一夜物語』第一巻、國民文庫刊行會、前掲書、pp.5-6。

26) 芥川龍之介「リチャード・バアトン訳『千一夜物語』に就いて」『芥川龍之介全集』第11巻、岩波書店、1996年、p.215。

27) 戦前では、マルドリュス版とバートン版を翻訳する試みが行われた。1927年に、Sakai Kiyoshi（1895-1952）により、"The World Famous Classic on Love" という標題で、マルドリュスの日本語翻訳は要約され、好色的な挿絵が含まれる一冊の本として出版された。だが、この本はすぐ検閲局により禁書された。その後、1929年から30年にかけて、記者の大宅壮一（1900-70）により、『千夜一夜』全12巻がバートン版の完訳として中央公論社から出版されたが、誤訳や省略箇所が多く、バートン版に存在した少なからぬ注が削られ、表現も曖昧になったため、水準の低いものとなってしまった。Sugita, ibid, "The Arabian in Modern Japan", p.18。

28) 佐藤正彰「筆写本とアラビア語刊本」『千一夜物語 マルドリュス版完訳』岩波書店、1982-83年、第4巻、pp.540-42。そこには『千一夜物語』のアラビア語の全原典が揃っている。

29) 大場正史「解説」『バートン版 千一夜物語』第[illegible]巻、河出書房、1966-1967年、p.548。

30) 豊島与志雄、渡辺一夫、佐藤正彰、岡部正孝訳『千一夜物語』全26冊、岩波文庫、1940-1945年。新版『千一夜物語 マルドリュス版完訳』全13巻、岩波書店、1982-83年。改版『千一夜物語』全13巻、岩波文庫、1988年。1968年に、豊島与志雄・渡辺一夫・佐藤正彰・岡部正孝の四人は、『千一夜物語』の26巻版で読売文学賞を受賞した（『日本近代文学大事典』第二巻、講談社、p.129）。

31) 岡部正孝「新はしがき」『千一夜物語 マルドリュス版完訳』第一巻、岩波書店、1982-83年、pp.4-6。

32) 岡部正孝「新はしがき」、前掲『千一夜物語 マルドリュス版完訳』p.5。本稿では1982-83年の岩波書店新版、2004年の再発刊版を利用する。

33) 佐藤正彰「はしがき」、前掲書、第1巻、p.iii。

34) 佐藤正彰「あとがき」、前掲書、第1巻、p.546。

35) 佐藤正彰「刊本」、前掲書、第1巻、岩波文庫、2004年、p.405。

36) 佐藤正彰「千一夜物語」『世界古典文学全集』全4巻、筑摩書房、1964年～70年。

37) 佐藤正彰「解説」、前掲書、第4巻、p.546。

38) 佐藤正彰「解説」、前掲書、第4巻、pp.549-50。佐藤は、ガラン版からスコット版（英文訳1811年、全6巻）、Rasmussen版（デンマーク訳1824年、全4巻）、Zinserling版（独訳1923年、全3巻）、Habicht版（独訳1825-41年、全15巻）、Torrens版（英訳1838年、カルカッタ版の第50夜まで、全1巻）、レイン版（英訳1839-41年、全3巻）、ヴァイル版（独訳1837-41年、全4巻）、ペイン版（英訳最初の完訳1882-84年、全9巻、1884年補巻、1889年第3巻完結）、Henning版（独訳1895-99年全24巻）、マルドリュス版（仏語1899-1904年、全16巻）、リットマン版（独訳1921-28年、全6巻）、Oestrup版（デンマーク訳1927-28年、配列も変えた個人的編訳本）、Salier版（ロシア語1929-39年、全8巻）を追究している。

39) Mardrus J.C., Le livre des mille nuits et une nuit / traduction litterale et complete du texte arabe, 16vols., Paris : Charpentier et Fasquelle, 1899-1904。

40) 杉田英明前掲稿、2007年、p.31。

41) 豊島与志雄他前掲『完訳 千一夜物語』第6巻、p.70。

42) 杉田英明前掲稿、2007年、p.31。Alf Layla wa-Layla, ed. Bulaq, Vol.1, p.208。前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』第四巻、p.179、第94夜（オマル・ブヌ・アン・ヌウマーンとその二人の御子シャルカーンとダウール・マカーン、そしてこの人たちに起こった驚異・珍奇な物語）。

43) 杉田英明「好色文学としての『アラビアン・ナイト』明治末期～昭和前期のバートン版・マルドリュス版紹介（上）」『ODYSSEUS』第9号、2005年、pp.13-14。マルド

リ：2版の対応箇所は、J. C. Mardrus, Vol.3, p.200；日本語訳、佐藤正彰『千一夜物語』I, p.394（第83夜）；Bulaq, Vol.1, p.196；前嶋信次『アラビアン・ナイト』四、平凡社、東洋文庫、1967年、p.122

44) 大場正史訳『バートン版』『夜の夜物語』全21冊、角川文庫、1953-1956年（改版、全12冊、角川文庫、1968-70年）；改訳、全8巻、河出書房、1966-1967年；挿画、山田芳裕、のち、全11冊、ちくま文庫、2003-04年

45) R. Burton, the Book of the Thousand Nights and a Night, 12 vols. London: H. S. Nichols, 1894. First edision 16 vols. 1885-88

46) 杉田英明前掲稿、2007年、p.2

47) 杉田英明前掲稿、2007年、p.3

48) ベイン版（邦訳最初の完訳、1882-84年、全9巻、1884年補巻、1889年第3巻完結）

49) 佐藤正彰「解題」前掲書、第1巻、p.392-93

50) 大場正史訳『エジプトの生活　古代と近代の奇妙な混淆』桃源社、1964年；E. W. Lane, "An account of the manners and customs of the modern Egyptians writing in Egypt during the years 1833-1835" London: Ward, Lock, 1890.

51) 大場正史前掲『解説』第一巻、p.549.

52) 大場正史前掲『解説』第一巻、p.518

53) Frank Hoff "Song, Dance, Storytelling, Aspects of the performing Arts in Japan, p.172

54) 大場正史前掲注29『解説』、第一巻、pp.546-47.

55) 杉田英明前掲稿、2007年、pp.4-6；大場正史、前掲書、第一巻、p.76

56) 杉田英明前掲稿、2007年、p.6

57) 島崎博、　島崎編『定本　島崎紀夫書誌』薔薇十字社、1972年、pp.312、414

58) 前嶋信次・池田錦哉『アラビアン・ナイト』、全18巻、平凡社、東洋文庫、1966-1992年

59) 杉田英明前掲稿、2007年、p.10.

60) 杉田英明前掲稿、2007年、p.10.　各巻の刊行年の列記は、1　1966年、2　1966年、3　1967年、4　1967年、5　1968年、6、1972年、7　1974年、8　1976年、9　1978年、10　1979年、11　1980年、12　1982年である。

61) 杉田英明前掲稿、2007年、pp.10-11.

62) 杉田英明前掲稿、2007年、p.14.　前嶋が使った原典版は次の通りである。カルカッタ第一版　ウィリアム・H・マクノーチン校訂、全4巻、1839-42年；ブーラク版　アブドアッラフマーン・アッサファティー・アッシャル

63) 前嶋信次『まえがき』、前掲『アラビアン・ナイト』第一巻、p.2

64) 杉田英明前掲稿、2007年、p.14.　前嶋は第一巻において「本から、絵もた狙みていに」p.77、「何無一不」p.143、「そうとは知らず」p.233などの原文のない語句を付加した。

65) 杉田英明前掲稿、2007年、p.15.

66) 前嶋は、初版版のp.57において「（このあと原文より四十語ほど省く）」としたが、第一刷以降に補われた文章は以下の通りである。「そして両腕で腰を抱き、その両足をわが肩にあてさせると、槍をかまえ、雷鳴に匹敵するや、城壁を打ち破りました。それで、この娘がまだ孔をうがたれ真珠、誰も御したことのない馬であることがわかりましたが、かれはその純潔を解い、かの女の青春の果を楽しみました。それから、一気ずは退いて、軍器をととのえると、さらに攻撃を繰返すこと前後十五回に及んだので、ついに相手は彼の棒を溶しました。こうして戦が終わると」ムム

67) 杉田英明前掲稿、2007年、p.16.

68) 杉田英明前掲稿、2007年、p.33

69) 杉田英明前掲稿、2007年、p.24

70) 森田草平前掲『千一夜物語　エドワード・ウィリアム・レーン英訳』p.6

あとがき

本稿は、私の博士論文の第一章を要約したものである。2011年4月、5月、長野県短期大学で客員研究員として博士論文最後の仕上げを行ない、博士号を得た。投稿に際し、自然が豊かな長野市で私の研究条件を整えて下さった長野県短期大学の上條宏之学長先生をはじめ、教職員の皆様や大学の同窓会である六鈴会の多くの方々に感謝の意を表したい。